

源氏物語の構想の展開と仏教思想

岩瀬法雲

論文の構想

- I 源氏物語の中には密教的なものと、浄土教的なものがある。具体的にどうかあるか。
- II その二つのものは、物語の構想とどう関係しているか。
- III そのことが当時の天台浄土教と、どんな関係にあるか。
- IV 作者の意図は。

序

源氏物語第一部、第二部、第三部のいわゆる建て増し構造は、平安朝の仏教、特に叡山のそれが、密教的なものから浄土教的なものに移ったことと関係がある。元来日本天台には法華一乗の中に密教的なもの

資料 (一) 表 対校の索引によると、ぐわん16例、ぐわんども5例、大ぐわん3例、ごぐわん5例、ごぐわんども2例、ごぐわんはたし2例。計33例。その内訳 第一部17例。第二例10例。第三部6例。

第一部 (17例)

番	巻	対校全書 頁行の段	立願者	願の目的	本	文 (全書による)	備考
1	願	1426	源氏	夕顔急変祈禱のため	「願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよといひやりつるは」と宣ふに		成就せず
2	葵	3468	左大臣	葵上の安産のため	いふ限りなき願ども立てさせ給ふけにや、たひらかに事成りはてぬれば		
3	須	548	源氏の侍者	源氏暴風雨にあつたため	暮れぬれば雷すこし鳴り止みて、風ぞ夜も吹く。「多く立つる願の力なるべし」といひあへり。		
④	明	5913	源氏	暴風雨やまず館に落雷	「まことにあとを垂れ給ふ神ならば、助け給へ」と多くの大願を立て給ふ。		本地垂迹

のと浄土教的なものが同居していて、それが次第に浄土教的なものに統一されて行つたのが源信の往生要集であるが、源氏物語の構想には偶然にその跡が覗われる。それが、物語の建て増し構造となり、各部にそれぞれの主題を持つ所以である。

I ぐわん(願)

まず密教であるが、これは現世利益を目的とするため、あくまでも現世肯定の姿勢をとる。浄土教が往生極楽のために現世否定を条件とするのと対蹠的である。ところで、現世の利益に預かろうとすれば、しばしば人は「願」を立てるであらう。「願」こそ密教的な信仰行為である。

第

二部 (10例)

源氏10(夕顔急変 須磨の危難 9)

左大臣1(葵上の安産)。明石上1(幸運)。帝1(勅願)。乳母11(玉鬘のため)。乳母1(夕顔のため)。

豊後11(玉鬘のため)。

右近11(玉鬘のため)。

番	巻	頁	対校全書 行の段	立願者	願の目的	本文(全書から)	備考
5	明	60 11	2	源氏	同右	御社の方に向きてまぎまの願を立て給ふ。	湖本抄本には「給ふ」なし
6	明	60 11	2	源氏	同右	また海の中の竜王、よろづの神たちに願をたてさせ給ふ。	
7	明	100 13	22	源氏	須磨で立願のお礼は後日に、とにかく	住吉にも、たひらかにて、色々の願はたし申すべきよし、御使して申させ給ふ。	住吉(大威徳)
8	源氏	126 7	15	源氏	いよいよお礼参りに	その秋住吉に詣で給ふ。願どもはたし給ふべければ、厳しき御ありきに	
9	源氏	127 1	15	源氏	同名	「内大臣殿の御願はたしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり」とて、	
10	源氏	129 7	16	源氏	かけた以上の願ほどきをする	来し方の御願にもうち添へ、あり難きまで遊びののしり明し給ふ。	
11	源氏	232 2	18	源氏	その翌日、同じくお礼参りに	かの人は過し聞えて(中略)御幣奉り、程につけたる願どもなど、かつがつはたしける	
12	源氏	177 8	2	源氏	石山にも須磨でのお礼に	京に帰り住み給ひて、またの年の秋ぞ(中略)石山に御願はたしに詣で給ひけり	石山
13	源氏	251 11	25	源氏	勅願のため	おはやけにも重き御おぼえにて厳しき御願ども多く立てて(中略)世にかしこき聖なりける	
14	源氏	362 4	7	源氏	玉鬘成人、上京を焦慮して	「いかさまにして、都に率て奉りて(中略)」など言ひ嘆く。仏神に願を立ててなむ念じける。	
15	源氏	372 3	18	源氏	海上安全、無事上洛のお礼に	「かの国を離れ給ふとても、多くの願立て申し給ひき。今都にかへりて、かくなむ御験を得て罷り上りたると、早く申し給へ」とて八幡にまうでさせ奉る	八幡(観世音)
16	源氏	377 4	24	源氏	夕顔にいたいとて長年に	あが君はいつれど、願を立てつれど、一例の藤原の瑠璃君といふが御為に奉る(中略)その人、この頃なむ見奉り出でたる。その願もはたし奉るべし」といふ	成就せず
17	源氏	380 12	28	源氏	玉鬘の幸運を	一の願もはたし奉るべし」といふ	長谷
18	源氏	360 9	94	源氏	明石上のため	わが君(明石上)を頼むことに思ひ聞えはへしかはなむ、心ひとつに多くの願を立てはべし	明石上にあてた最後の消息文
19	源氏	370 10	103	源氏	源氏や明石姫君のため	また、またしき願などの侍りけるを御心にも知らせ奉るべき折あらば	明石上、源氏に右のことを話す
20	源氏	373 5	104	源氏	明石姫君のため	横ざまにいみじきめを見、漂ひしも、この人一人(姫君)の為にこそあれ、いかなる願をか心に起しけむ	右につき源氏明石上に言う
21	源氏	14 7	26	源氏	明石姫君のため	住吉の御願かつがつはたし給はむとて、東宮の女御の御祈に詣で給はむとて	源氏入道の願文におどろく
22	源氏	14 10	26	源氏	子孫繁栄のため	年ごとの春秋の神楽に、必ず長き世の祈を加へたる願ども	
23	源氏	15 4	27	源氏	須磨で立願したお礼	浦伝のもの騒しかりし程、そこらの御願ども、皆はたしつくし給へれど。(中略)かかるいろいろの栄を見給ふにつけても、神の御助けは忘れ難くて、対の上をも具し聞えさせ給ひ、さるべきにて、しばし、かりそめの身をやつしける、昔の世の行ひ人にやありけむ」などおぼしめぐらす	源氏自身の現世利益の思想、明石入道のと呼応す

24	葉下	75 1	96	源氏	紫上急病	「さりとて物怪のするにこそあらめ。いとかくひたぶるにな願ぎぞ」としづめ給ひていよいよいみじき願どもを立て添へさせ給ふ	紫上蘇生す
25	霧	248 11	37	律師	一条御息所のため	俄かに消え入りて（中略）律師も騒ぎ立ち給うて願など立てのしる	成就せず
26	御法	298 14	2	紫上	自分の冥福にそなえて	年ごろ、わたくしの御願にて書かせたてまつり給ひける法華経千部、いそぎ供養し給ふ	死期予感
27	御法	299 13	2	紫上	同右	げに、いそのかみの世々経たる御願にやとぞ見えたる	同上

明石入道 5（明石上のため 1 子孫のため 1 姫君のため 3）

源氏 2（おれに 1 紫上急病に 1） 律師 1（御息所のため 1） 紫上 2（逆修のため）

### 第三部（6例）

28	稚	45 2	1	匂宮	宿願をはたすため	兵部卿の宮初瀬に詣で給ふ。古き御願ありけれど、思しも立たで年頃になりけるを	
29	浮	101 2	19	近侍女右	浮舟のため	「長谷の観音、今日事なくて暮し給へ」と大願をぞ立てける	人々に匂宮を薫とみせかける不安に
30	浮	147 5	71	同右	浮舟のため	「事なくすぐさせ給へ」と長谷石山などに願をなむ立て侍る	薫の警戒いよいよ厳重
31	手	231 2	1	僧都の母と妹	宿願のため	八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。古き願ありて、長谷に詣でたりけり	
32	手	290 1	56	同右	同右	「この三月に、年老いて侍る母の、願ありて長谷に詣で侍りし、帰さの中宿りに、宇治の院……」	浮舟発見の事情を啓す
33	夢	315 4	3	同右	同右	「かしこに侍る尼どもの、長谷に願侍りて、詣でて帰りける道に、宇治の院といふ所に……」	右のことを薫に話す

匂宮 1（宿願のため） 右近 2（浮舟のため） 僧都の母と妹 3（宿願のため）

対校の索引によると、資料Ⅰの表の通り、「願」に関する用例は 33 例ある。第一部 17 例、第二部 10 例、第三部 6 例と、次第に数は少なくなっていく。第一部の 17 例中、立願者が源氏に属する 10 例中 9 例まで須磨の危難に関係している。次は玉鬘に関する 3 例である。ところで、これらの人物やその周囲の者の祈った神仏の、神というのも本地垂迹の神であることは、4 番の源氏のことばでもわかる。住吉の神は大威徳明王であり、八幡の神は観世音菩薩であるといわれる。この本地垂迹説がまた密教独特の教理である。12 17 番の石山や長谷の観音も、仏は仏でも靈験あらたかな密教仏で、その寺は今も密教の代表的な寺である。

第二部は 10 例中、5 例までが立願者は明石入道である。彼は立てた「願」のすべてが成就しそうだと思えて、遁世を決意して、明石上に最後の消息を書き、その中で彼女の生まれるに当って見た夢のことをいって、「自ら須彌の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世をてらす」といつている。須彌山は明石上を意味し、月日は、明石姫君と春宮で、それがおのおの中宮となり、皇位に即く日も近づいたと見て、夢に示された通り、「自らは（中略）その光にあたらず（中略）、ちいさき船に乗りて、西の方をさして漕ぎ行く」というのである。一方源氏は 23 番にも見える通り、この入道を、所謂権現

と見ていることである。これがまた本地垂迹説に拠るものであることはいうまでもない。しかし、それよりも更に密教的なことは、嫉妬を抑え続けてついに息絶えた紫上が、源氏の「願」によって、不動明王の誓願力で蘇生することを語る24番である。これはこの物語の「願」の頂点であろう。というのは、26・27番の紫上のそれは、もはや自らの冥福に備えた、所謂逆修のためのものであるからである。

第三部になると、その数も急に少くなり、それに、28番の匂宮を除いては、主要人物に「願」の語が見えないことである。いつまでも前時代的な享楽主義匂宮には適しく、このことが同時に密教的なものが、第三部の世界では、すでに後向きなものになったことを暗示する。その証拠に、手習巻で、

「おなじ仏なれど、さやうの所に行ひたるなむ、験ありてよき例多か

る」  
と、僧都の妹尼から長谷詣を誘われた浮舟が、  
「昔、母君・乳母などの、かやうに言ひ知らせつつ、たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあれ、命さへ心にかなはず、たぐひなきいみじきめを見るは」  
と、「願」はもう凝り凝りだと思っている。  
Ⅱ 無 情  
現世否定の契機となる無常感のことは、「つねなし」「つねなき」の語でしばしばこの物語に見えるが、対校の索引にないので、大成の索引を用いる。

資料 (一) 表 対校の索引にはないので、大成の索引による。

つねなき4例(第一部2、第二部10、第三部2) 計 33例  
つねなし29例(第一部9、第二部11、第三部9)

第一部 (11例)

番	巻	大成全書 頁の段	感じ 者	その動機	順逆	本	文(全書による)	備
1	紫	160 5	源氏	説教から	逆	僧都、世の常なき御物語、後の世の事など聞え知らせ給ふ。わが罪の程恐しう、あぢきなきことに心をしめて、生ける限りこれを思ひなやむべきなめり、まして、後の世のいみじかるべきことと思ひ續けて、かやうなる住ひもせまほしう覚え給ふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ	源氏北山で少女(紫上)をみて	
②	葵	318 6	源氏	葵上の死	逆	「常なき世は、大方にも思う給へ知りしを、目に近く見侍りつるにいとほしき事多く思ひ給へみだれしも、度々の御消息になぐさめ侍りてなむ、今日までも」と	出家を思い立つほどの心も藤壺に慰められて	
③	賢	356 8	源氏	雲林院に律師を訪して	逆	所がらに、いとど世の中の常なきを思ひ明しても、なほ、「うき人しもぞ」と思し出でらる	藤壺に心ひかれる	
4	須	397 6	葵上の女房	源氏に対し	順	かく渡り給へるを珍しがり聞えて、(中略)ことにもの深からぬ若き人々さへ世の常なき思ひ知られて涙にくれたり。	出発前左大臣邸を訪う	
5	須	402 6	源氏	今の境遇に	順	「かく世を離るる際には、心苦しきことの自ら多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき世に、人にもなさけなきものと、心おかれてはてむこと、いとほしうてなむ」と聞え給へば	西の対に紫上を訪う	

第二部 (11例)

⑥	明	457 13	11	源氏	今の境遇か	「世に離れし時より、世の常なきもあぢきなく、行より外のことなくて月日を経るに、(中略)からめる人ものし給ふとはほの聞きながら、いたづら人をばゆゆしきものにこそ思ひ棄て給ふ
7	明	468 11	19	源氏	今回の政変	「世の常なきにつけても、いかになり果つべきにか」と嘆き給ふを、かうにはかなれば、うれしきに添へても
⑧	絵	574 1	13	源氏	栄華を反省	「世の常なきに御世なり。大臣ぞ、なほ常なきものに世を思ひて、今すこしおとなびおはしますと見奉りて、なほ世を背きなむと深く思ほすべからむ」とて、常なき世にかくまで心おかる
9	朝	653 9	14	源氏	人の命	「いといたくわかひ給へるは、誰が慣はし聞えたるぞ」とて、常なき世にかくまで心おかる
10	常	836 4	6	源氏	人の命	「もあぢきなきのわざや」とかつはうちながめ給ふ
11	野	867 3	7	作者	昔に変わる大宮	「いかに、大臣にも、この花園(玉鬘) 見せ奉らむ、世もいと常なきを、と思ふに、いにしへも物のついでに語り出て給へりしも」

源氏9 (順4、逆5)、葵上の女房1 (順)、作者の評1 (順)

⑫	菜上	1406 4	25	源氏	出家	故院に後れ奉りし頃ほひより、世の常なく思ふ給へられしかば、この方の本意深く進み侍りにしを、心弱く思ふ給へたゆたふ事のみ侍りつつ、(中略) おくれ奉り侍りぬる心のぬるさを、などてかきのみは思ひ悩まむ
13	菜上	1061 13	42	紫上	嫉妬を自制	かくおしはかる人(六条院の女性たち)こそなかなか苦しけれ。「世の中もいと常なきものを、何か惜しからむ」とおぼしのたまふべし
14	菜下	1133 8	18	臣太政大	辞職	「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も、位を去り給ひぬるに、年ふかき身の冠を掛けむ、何か惜しからむ」とおぼしのたまふべし
15	菜下	1174 14	82	柏木	女三宮	「さしも等しからぬきはの御方々にたち交りめざましげなる事もありぬべくこそ。いとよく聞き侍りや。世の中はいと常なきものを、ひとときはに思ひ定めて、はしたなくつききりなる事なき世とは身ひとつにのみ知り侍りにしを、後れぬと宣はせたるになむ。
⑬	菜下	1204 12	124	臘月夜	出家	常なき世とは身ひとつにのみ知り侍りにしを、後れぬと宣はせたるになむ。
17	柏	1256 11	45	御息所	柏木の死	「あはれなることは、その常なき世のさがにこそは。いみじとても、また類なき事にやはと、年つよりぬる人は、しひて心強う醒まし侍るを、さらに思し入りたるさまの。」
⑮	鈴	1301 3	14	源氏	出家	われより後の人々に、方々につけて後れ行く心地し侍るも、いと常なき世の心細さの、のどめ難う覚え侍れば、世に離れたる住ひもやと、やうやう思ひ立ちぬるを
19	霧	1341 1	42	夕霧	御息所の死	涙もろにおはせぬ心強さなれど、所のさまと、人のけはひなどを、思しやるもいみじうて、常なき世の有様の、人の上ならぬも、いと悲しきなり。
⑯	霧	1352 3	55	紫上	反省	物のあはれ、折をかしきことを、見知らぬさまに引入り、沈みなどすれば、何につけてか、世に経る栄々しきも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは、
21	御法	1387 1	9	紫上	死を予知し	さかしげに、亡からむ後など宣ひ出づる事もなし。ただなべての世の常なき有様を、おほどかに言ふなるものから、
⑳	御法	1396 5	20	源氏	わが生涯を反省して	いはけなき程より悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめ給ひける身を心強く過して、つひに來し方行く先も例あらじと覚ゆる悲しさを見つるかな。

源氏3 (順21、逆1)。紫上3 (順2、逆1)。太政大臣1 (順)。柏木1 (順)。臘月夜1 (順)。御息所1 (順)。夕霧1 (順)。計 順8 逆3 11

第三部 (11例)

23	匂宮	1431	1	4	夕霧	家居	逆	心をとどめて造り占めたる人の家居の、名残なくうち棄てられて、世のならひも常なく見ゆるは、いとあはれにはかなき知らざるを、わが世にあらむかぎりだに、この院あらさず	源氏亡きあとの六条院に対して、
24	橋	1530	9	37	薫	柴刈り舟	順	あやしき船どもに柴刈り積み、(中略)はかなき水の上に浮びたる、誰も、思へば同じ如なる世の常なきなり。われは浮ばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは、と思ひ続けらる。	柴舟の往來を眺めて
25	総	1597	2	8	薫	世間一般	順	常なき世の御物語に、時々さし答へ給へるさま、いと見所多くめやすし	大君に対する思いを強いてまぎらわして
26	総	1607	7	22	薫	大君	順	聖たち給へりしあたりにて、常なきものに思ひ知り給へるにやと、おぼすに、いとどわが心通ひて覚ゆれば、	大君に拒絶されて自制して
27	総	1627	3	52	薫	女房たちに對して	順	上へこそ心ばかりもてしづめたれ、(中略)下の心もりて見ゆるもあるを、さまさまにをかしくも、あはれにもあるかな、と立ちても居ても、ただ常なきありさまを思ひありき給ふ	大君以外の女には動かしめぬ
28	宿	1713	14	16	薫	大君の死	逆	「明るるま咲きて」とか、常なき世にもなずらふるが、心ぐるしきなめりかし	朝顔の花に亡き大君をしのんで、
29	宿	1717	12	21	薫	大君の死	逆	「同じごと、世の常なき悲しびなれど、罪深き方はまさりて侍るにや、とそれさへなむ心憂く侍る」とて、泣き給へる程、いと心深げなり。	往生の障りとなる
30	蛸	1943	7	13	匂宮	浮舟の死	順	げに世の中の常なきをも、心細く思ひ侍る」とのたまひて	浮舟の死に打撃をうけて病む
31	蛸	1944	1	13	匂宮	薫	順	「世の中の常なきことを、しみて思へる人しもつれなき」と、うらやましくも、心にくくも思さるるものから、真木柱はあはれなり。	匂宮は薫の真意を知らぬ
32	蛸	1958	4	27	薫	浮舟の死	順	世の常なきもいととおもひのどめむかたなくのみ侍るを	浮舟の母を慰めて
33	蛸	1963	8	32	薫	浮舟の死	順	常なしとこころ世を見るうき身だに人の知るまで嘆きやはする。	薫に同情する小宰相への返歌

夕霧1(逆)。薫8(順6)。匂宮2(順)。計順8(逆3)11例

資料(1)の表の通り、これも33例ある。第一部・第二部・第三部各々11例で、「願」の場合とは異り、だんだん、少なくともなっていないことである。

人物中最も頻度の高いのは、第一部の源氏の9例と、第三部の薫の8例で、これだけでも、この物語の前編後編それぞれの主人公に、作者は「無常」とどう取り組ませようとしたかが覗かれる。

さて、源氏が始めて無常を感じたのは、17才の春、北山の僧都の僧庵においてである。1番がそれで、僧都の法話を聞いて今更に藤壺との罪が恐しくなり、そのまま出家を考えるほどであるが、昼、垣間見た少女のことが忘れられなく、折角の道心が欲心に妨げられる。「逆」の判定

はその意味である。2番も同じである。彼に属する9例が9例まで、この二つの心の葛藤で、結局道心の方が負ける所に、第一部の特色が見える。即ち、「無常」の語はあっても現世否定の世界にはならず、「願」

で見た通り、肯定の世界なのである。8番に見る、栄華のさ中であつて、「なほ常なきものに世を思して云云」というのは、一応は無常感に随順しているようだが、冷泉帝も成人され、皇位の安泰も見届けてからと思う所が、やはり第一部である。所謂法華経の「現世安穩、後生善所」で、いかにも天台的で、これは明石姫君の栄えを見届けて山に入つて行つた入道の信仰と全く同じである。

第二部の源氏に関する3例121822番、みな敢えて出家のできなかった

反省である。16番は当面は朧月夜の出家であるが、実はそれを見舞った源氏の、後れた「口惜しさ」である。中でも18番は、最近様々に思いがけないことを見て来た源氏が、いよいよ出家を決意し、秋好中宮に後事を依頼する所である。彼にとって、純粹の「順」はこれが初め手で、22番は、紫上に取り残された彼の述懐である。

「いはけなき程より悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめ給ひける身を」

と、苦悩の多かった生涯は、わが救のため、かねて仏の予定の中にあつたのだと目を覚ます。これは同時に、この物語の第一部と第二部とを統一する作者の宣言でもある。同じことが幻巻にもう一度見える。

「この世につけては、飽かず思ふべき事をささあるまじう、高き身に生まれながら、また人より異に、口惜しき契にもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、仏などの掟て給へる身なるべし」(四段)

極楽往生を真実の生活として、苦悩の多いこの世を方便と見る、法華経方便品の思想である。かつて、蜃巻で物語について源氏が玉鬘に言った、「仏の、(中略)説き置き給へる御法も、方便といふことありて云云」、また、「言ひもて行けば、ひとつ旨にありて、菩提と煩惱とのへだたりなむ、この人のよきあしきばかりの事は変りける。よくいへば、すべて何事も空しからずなりぬや」(一四段)と、これに、今身を以て解答したことになる。

第三部、薫になると、源氏と異り、彼は生まれながらにして父母の罪を背負われた罪の子である。匂宮巻には、14才で、すでに、

「おぼつかな誰に問はましかににして始めもはても知らぬわが身ぞ」

と、深刻に苦しみ初めている。「生まれ生まれ生まれ生まれ、生れ始めニ暗ク、死ニ死ニ死ニ死ニ死ニ終リニ冥シ」(秘蔵宝輪の序)が思い出される。源氏が生涯をかけて無常を知つたのに対して、彼は最初から、「どこから、どうして来たのだ。そうして、どこへ行くというのだ」と、更に根元的な問題で悩んでいる。だから、24 25 26番に見るように柴舟の往き来を見ても、生きることの不安を感じたり、彼に許さぬ大君と無常を話題に夜を明かしたり、その答えふりに心をひかれ、なおのこと共鳴を覚えたりするのである。しかし、何といつても彼の無常感の特色は、28番に見える大君の死後のそれである。はかない朝顔を見るにつけ、亡き彼女がしのばれ、自らその花に心を奪われて行く。ここでも無常なるが故に引かれるのである。無常感が出離の縁とはならず、かえって美的なものとしてこの世に引きつけるのである。

朝顔に大君の面影を追う彼は、やがて中君にそれを追ひ、更に浮舟にといよいよ罪障を深める。そうして夢の浮橋巻で、

法の師をたづめる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかなと、漸く目が覚める。

### Ⅲ 厭離穢土

仏の道から言えば、無常と知れば直ちに厭離穢土へと行動を起さねばならない。「頭上に落ちかかる火を払ふごとくせよ」との経文を往生要集も引いている。美的に玩ぶなどはとんでもない。ところで、厭離の訳語「いとひはなる」が、この物語に4例ある。

資料(三) いとひはなる 4例(鈴1。橋1。総2。)

番	巻	対校全書	必要者	動機など	本	文(全書による)	備考
1	鈴	1971	4	女三宮の出 家生活	講師のいと尊く、事の心を申して、この世にすぐれ給へる盛を厭ひ離れ給ひて、長き世々に 絶ゆまじき御契を、法華経に結び給ふ、尊く深きさまをあらはして、 ここには然べきにや、ただ厭ひ離れよと、ことさらに仏などの勧めおもむけ給ふやうなる有 様にて、おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、残少き心地に、はかばかしくもあら で過ぎぬべかめるを	持仏開眼供養の表 白文	八宮、薫の道心に 感心して
②	橋	142	20	八宮	自分の境遇 から	さいつ頃の夢に「世の中を深ういとひ離れしかば、心とまる事なかりしを、いささかうち思 ひしことに乱れてなむ、唯しばし願ひのところに隔たれるを思ふなむ、いとくやしき。すす むるわざせよ」と、いとさだかに仰せられしを	八宮、阿闍梨の夢に現 れて、まだ成仏せざる ことを告げる
③	総	1767	102	八宮	同右	世の中をこと更に厭ひはなれねと、すすめ給ふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせ給 ふにやあらむ。	
④	総	1836	111	薫	大君の臨終 逆		

資料(四)の1番は、女三宮の持仏開眼供養の表白文中にあつて、講師が読みあげるもので、それを除くと、他の3例はそれぞれ本人の反省の中にあつて、第一部、第二部にはなく第三部も前半にのみ集中している。

薫は、今も述べた通り、源氏と異り無常は生まれながらに知っていた。

彼の場合は次の段階が必要なのである。即ち大君の臨終、その枕上で、

「こと更に厭い離れねとすすめ給ふ仏などの云云」とある4番がそれである。このことは、第二部の無常から第三部、厭離穢土へと構想の展開を暗示するかのように見える。八宮は2番のように、厭離穢土は仏の勧めによつてすでに実行していたというが、3番に見えるように、臨終の正念が乱れたばかりに、いまだに極楽往生ができずにいる、と宇治の阿闍梨の夢に現われて回向を頼んでいることである。湖月抄は「姫君達の事ゆゑにまよひ給ふとにや」と注している通り、大君と中君とのことが気がかりになつていたことは言うまでもない、現にその頃、中君の昼寝の夢に八宮が現われたことを、

「故宮の夢に見え給へる、いと物おぼしたるけしきにて、このわたりにこそほのめき給ひつれ」(総角九三段)

と、大君に語っている。しかし、本人の八宮自身にとつては今一人の娘、浮舟がいるはずである。物語の上にはまだ登場していないが、宮自身には誰よりも浮舟が心配だつたろうと思う。というのは、上二人は、かねて薫に依頼し、薫も引き受けている。浮舟の方は、宮自身の勝手からわが子と認知せずその母もろともに突き離されたことになつてゐる。俗聖とも言われた道心の深い宮が、臨終に無関心でいられようはずがない。私はそう解釈したい。そのことは、宮も修行の指針にしていたろうと思われる往生要集臨終行儀の文、後掲資料(四)の4、5番にも適い、また物語の構想から言つても、浮舟登場の唐突さも緩和されることになる。

#### IV 浮舟の救われる経過

この物語の人物中、あるいは救われたのではないかと思えるものは、浮舟一人である。



資料 四 浮舟の救われる経過

番	巻	対校全書		本	文（全書による）	備考
		頁	の段			
1	浮	151	73	ながらへばかならず憂きこと見えぬべき身の、亡くならむは、なにか惜しかるべき		薫と匂宮との板ばさみになり死を決意
2	手	252	19	手習に、「身をなげし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし」思ひのほか心憂ければ		助けられたことを喜ばない
⑧	手	277	42	鬼の取りもて来けむ程は、もの覚えざりければ、なかなか心やすし。いかさまにせむ、と覚ゆるむつかしきにも、い みじきさまにて生き返り、人になりて、またありしいろいろの憂きことを思ひ乱れ、むつかしきとも、おそろしきとも、 ものを思ふよ、死なましかば、これよりもおそろしげなる者の中にこそはあらまし、と思ひやらる。		生きることでもできず死ぬこともできない。
4	手	285	50	「流転三界中」などいふにも、断ちてしものを、と思ひ出づるもさすがなりけり。		得度式中の心境
⑤	手	286	52	「なきものに身を人も思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄ててつる。今はかくて限りつるぞかし」と書いても、な ほみづからいとあはれと見給ふ。かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへすかへすもそむきぬるかな		出家翌朝の心境
⑥	手	298	63	この本意のことし給ひてのちより、すこしはばれしうなりて、尼君とはかなくたはぶれもしかはし、暮打ちなどし てぞあかしくらし給ふ。行ひもいとよくして、法華経はさらなり、こと法文なども、いと多く誦み給ふ。		その後の心境

薫と匂宮との板挟みになって苦しんだときは、死にさえすれば苦惱から逃れられると、期待を持っていた。ところが、助け出されて後は、新しく中将なる男につけまわれ、周囲の者からも勧められるのが堪えられない。3番は、男を避けて僧都の母尼の部屋に隠れる場面で、不安に戦く彼女には、手をかざして自分を見る母尼が、怪物に見え、今にも食われるのではないかと恐れる。かと言って死んだら、更に恐しい地獄の鬼どもに取りこめられるにちがいないと思うと、生きることすら、死ぬこともならない、絶体絶命の危機に立っている。物語中、こんな危機に直面したのは彼女一人である。実は、これが救いに預かる唯一つの資格なのである。彼女が僧都の下山を待ち受けて、出家をせがんだのは、そういう心境にあったからであった。

何もかも捨て果てたつもりでいたのに、髪だけが残っていた。5番の二首の歌にそれが感じられないだろうか。しかし、それも捨てることができた。6番はその解放の喜びである。こういう彼女を私たちはかつて

見たことがなかった。

## V 作者の意図

以上、第一部はもろもろの「願」の達せられる現世肯定の世界であり、第二部はそれを裏返したもの。――源氏始め、期待の外れた様々の人物が、次から次へと投げ出されて行く無常の世界である。無常感に厭離穢土へと進まなければ救済はないとは言え、それがいかに至難なことか、それを問題にしたのが第三部の世界である。このことは、「ぐわん」、「つねなき」、「いとひはなる」の三語の分布を物語全体に亘って、それぞれの角度から三回見直して、そうした結果を得たのである。

資料(6) 往生要集寛和元年(九八五)成立

番	頁	要旨	本	文	備考
1	1	撰述の由来を明す		夫れ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か帰せざるものあらん。但し顕密の教法、其文一に非ず、事理の業因、其行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと為さず、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや。是故に念仏の一門に依つて聊か経論の要文を集め、之を披いて之を修せば、寛り易く行じ易からん。総じて十門あり、分つて三巻と為す。 一には厭離穢土、二には欣求浄土、三には極楽の証拠、四には正修の念仏、五には助念の方法、六には別時の念仏、七には念仏の利益、八には念仏の証拠、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。之を座右に置いて廃忘に備ふ。	
2	1	厭離穢土を明す		大文第一に、厭離穢土とは、夫れ三界は安きことなし。最も厭離すべし。今其相を明すに総じて七種あり。一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には総結なり。	
3	20	人間趣を明す		第五に、人道を明せば、略そ三相あり、応に審かに觀察すべし。一には不浄の相、二には苦相、三には無常の相なり。	
4	150	臨終の行儀を明す		十には、正しく終に臨む時、応に云ふべし、仏子知るや不や。唯今即ち是れ最後の心なり。臨終の一念は百年の業に勝れたり。若し此の刹那を過ぎなば、生るる処応に一定なるべし。今正に是れ其時なり、常に一心に仏を念じて決定して西方の極楽の微妙なる浄土功德池の中の七宝蓮台の上に往生すべし。	「八宮臨終の一念の乱れ」について
5	202	臨終の念相を明す		臨終の時、一念決定の邪見を起せば、即ち阿鼻地獄に墮つるが如し。	同右
6	2	等活地獄を明す		初に等活地獄とは(中略)或は極利なる刀を以て分分に肉を割くこと厨者の魚肉を屠るが如し。涼風来り吹けば尋いで活くこと故の如し。歎然として復起り、前の如く苦を受く。	蘇生当時の浮舟
7	224	卷末の文		永観二年甲申冬十一月天台山延暦寺首楞嚴院に於て此文を撰集す。明年夏四月に其功を畢ふ。(984-985)	案式部日記成立と比較

ところで、当時、貴族や学者の間で流行し始めた源信の往生要集は天台浄土教の中心教理である。そこには、人間救済の問題について源氏物語と同じ基盤がある。資料(6)の1番に見る通り、「顕密の教法、其文一に非ず、予が如き頑魯の者、豈敢てせんや」と両教を批判して、厭離穢土を説くのもわかるが、このことは物語の作者が、当時の貴族の栄華にそのはかなさを見たことから、物語が第一部から第二部へ展開しなければならなかった理由とも通じる。源信はなぜ念仏を行じなければならぬかと言つて、三界六道みな不安の世界であると言ひ、わけても人間界

は、不浄相、苦相、無常相の世界だと説く。それが3番であるが、源氏物語は不浄相こそ説かないが、五十四帖あげて苦相と無常相を説いて、厭離穢土へと運ぼうとする限りでは、二人の人間観に変わりはない。しかし、それからが違ふのである。即ち源信は、阿彌陀仏の浄土の様や仏身の相好を一々具さに観じることによつて欣求浄土の実をあげられるとするのに対して、源氏物語の作者は、あまりにも人間性を掘り下げるために、欣求浄土はおろか、厭離穢土すらも至難であると訴える。このことは、また自分の体験として、日記にも書いてある。

資料内 紫式部日記寛弘五年（一〇〇八）七月より同七年（一〇一〇）正月十五日まで

番	頁	段	筆者の 求道心	本	文 （日本古典全書による）	備 考
2	102	1	弱	強	みありきまなどの、いとさらなることなれど、うきよのなぐさめには、かかる御前をこそ、たつねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづわするに、かつはあやしき。	資料(二)の20番との関係
208	40	強	強	弱	人は、といふとも、かくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひはべらん。世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、ひじりにならん、懈怠すべうもはべらず、ただひたみにそむきて、くもにのぼらぬほどの、たゆたふべきやうなんはべるべかなる。それにやすらひはべるなり。	資料(二)の12番と比較

資料内の1番のように、日記は美にあこがれる心と、それを煩惱と批判する道心との衝突から書き出し、2番はその頂点とも云うべき消息文の終りに見える自己告白のことばである。「ひじりにならん」に懈怠すべうもあらず」と宣言するほどの道心を持ちながら、「くもにのぼらぬほどのたゆたふべきやうなんはべるべかなる」と、生きる限り、どうにもならない煩惱に障えられてと嘆くのである。この「たゆたふ」の語は、資料(二)の12番に見た、朱雀院の出家に遅れた源氏のことばの中にも見える。あるいは源氏物語は亀井勝一郎氏の指摘されるように「たゆたひ」の文学だとも言えよう。

ところで、日記のこの告白は、源氏物語とともに、結果的には往生要集を批判していることになる。源信は顕密両教を批判して立ったが、観想といい、諸行往生といい、それぞれにまだ密教的であり、顕教的であって、十分に批判されてはいない。欣求浄土には、観想が最上だといって、——上根の者には、極楽浄土のさまを、中根の者には、その仏身を、下根の者にはその白毫相をと、それぞれ了々分明にと勧めるのは、凡夫はついても行けない。ただ彼が、いずれの観にも堪えない極悪劣機の者のためにと用意した称名会仏だけが、僅かに期待が持てそうである。後世、法然や親鸞が観想を捨て、諸行を捨て、専ら称名念仏を往

生の正因と取上げたのは、人間の煩惱を凝視して目をそらさなかったからである。その意味では、厭離穢土すら至難とした源氏物語の作者は、法然親鸞に先立って、往生要集を批判していたということにもなる。

## 付 記

○昭和三十八年六月十六日、慶応義塾大学にて、全国大学国語国文学会主催の研究発表会で発表したものに、修正を加えたもの。  
○往生要集との関係をもっと詳しく取り上げなければならないのだが、それは他日に譲る。

（一九六三・八・一）